

# エンカウンター (ENCOUNTER)

## 第225号

2021年1月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wig.jp/>

佐生健光『キリスト教と称名』より (10)

### キリスト教の称名について

#### 1 はじめに

今回は、その称名の信仰が、人間の救いにとって不可欠な要因となっていることを、旧約、新約両聖書によって、立証しようとするものである。もとより、私は平凡な1信徒にすぎず、キリスト教の知識も浅く、神学も知らず、特別に聖霊を賜った経験もない。従って、それは分に過ぎたことであるのは、充分に分かっているつもりであるが、なぜか筆とる手を抑えることができない。

後になって、この真理を余すところなく明らかにする人が出現するまで、もしこの拙文が小さなパイロットランプの役目を果たすことができるなら、望外の喜びとなる。

あるいは、このささやかな一文を目にされた方が、称名を志されるなら、それ以上に大きな喜びとなるであろう。

## 2 旧約聖書における称名について

### 創世記

旧約聖書にはじめて称名の記事が登場するのは、はやくも創世記の初めのうちに見ることができる。

**セトにも男の子が生まれた。彼はその子をエノシュと名付けた。主の御名を呼び始めたのは、この時代のことである。(創世記 4・26)**

エノシュは人類の始祖アダムの孫であり、父セトはアダムの子に当たる。従って、人類が地上で生活を始めて間もなく、彼らは主の御名を呼び始めたことになる。

創世記には、引き続き数か所に称名の記事が散見されるが、いずれも祭壇を築いたり由緒ある樹木を植えなどして、主の御名を読んでいる。

**アブラハムは、ベエル・シェバに一本の<sup>ぎよりゆう</sup>御柳の木を植え、永遠の神、主の名を呼んだ。(創世記 21・33)**

これらはアブラハムが妻サライ、甥ロトと共に一族の民を引き連れて、カナンの地に入った頃の記事である。本文ではアブラハムが主の名を呼んだことになっているが、祭壇や樹木の前に列席した一族も共に唱和したであろうとも想像される。その他、「主の御名を呼ぶ」という言葉が他の箇所にも見られるが、これらはエホバの神に対する感謝の称名であり、多くは祭事の折に称えられたとみてよいであろう。

## 出エジプト記

出エジプト記によると、イスラエルの民が出エジプトを敢行したとき、ようやく紅海を望むところにたどり着いた頃、後を振り返ってみたら、ファラオの軍が彼らの後を追撃してくるのが見えた。前には海、後ろには軍という絶体絶命の状況に立たされて、彼らはここで主を呼んだ。

ファラオはすでにまじかに迫りイスラエルの人々が目を上げてみると、エジプト軍はすでに背後に襲いかかろうとしていた。イスラエルの人々は非常に恐れて主に向かって叫び、また、モーセに言った。……（出エジプト 14・10）

モーセは主の言葉に従って杖を高く上げ、海に向かって差し伸べた時、海は二つに分かれ、海の中にできた道をイスラエルの人々は通って行くことができた。しかし、後を追ってきたエジプト軍の上に大波が襲いかかり、彼らは海に飲み込まれて全滅してしまった。モーセは、イスラエルの人々とともに主を賛美して歌った。

主に向かってわたしは歌おう。

主は大いなる威光を現し

馬と乗り手を海に投げ込まれた。

主はわたしの力、わたしの救いとなってくださった。

この方こそわたしの神。わたしは彼をたたえる。

わたしの父の神、わたしは彼をあがめる。

……（出エジプト記 15・1-2）

イスラエルの民は大きな恐れをもったとき、その恐れから救われようと主に叫び、大きなよろこびを持ったとき、主を呼ばわたったのである。

彼らがエジプトを脱出する動機となったのは、エジプトでいじめられたからである。モーセは、その時のことを次のように言っている。

私たちの先祖はエジプトに下り、長年、エジプトに住んでおりました。エジプト人がわたしたちの先祖もわたしたちも苦しめたので、主に助けを求めて叫びますと、主はわたしたちの声を聴いて、御使いを遣わし、エジプトから導き出してくださいました。（民数記 20・15-16）

## 申命記、ヨシュア記、士師記

同様の記事が、申命記（4・6, 26・7）ヨシュア記（24・6, 7）などにもみられるが、何れも出エジプトという特定の出来事においての、民の神に対する呼ばわりと、それに対する神の救いの記述であるといえよう。呼ばわりという行為は、イスラエル民族の歩みの中に、誇り高く刻み込まれていったように見える。しかし、時の推移とともに、イスラエルの民はエホバから離れて、他の神に仕える誘惑に負け、罪を犯すようになっていく。彼らが犯した罪を悔い、エホバの前に告白するとき、彼らはまた主を呼ばわった。

イスラエルの人々は、主に助けを求めて叫んだ。「わたしたちはあなたに罪を犯しました。わたしたちの神を捨て、バアルに仕えました。」主は、イスラエルの人々に言われた。「エジプト人、アモリ人、アンモン人、ペリシテ人、シドン人、オマレク、マオンがあなたたちを圧迫し、わたしに助けを求めて叫んだ時、わたしは彼らの手からあなたたちを救ったではないか。……」（士師記 10・10－12）

士師記にはサムソンの物語があるが、彼がペリシテ人と戦った折、乾き甚だしく、死にかかったが神に呼ばわった。神は地のくぼみを裂いて水を流して、彼を救い給うた、という記事がある。（士師記 15・18－20）この記事はその一例である。

## サムエル記

サムエル記上にも同じ叫びがあるが、ここには自分の罪の告白がこめられているところが、新たな神への呼ばわりといえよう。しかし、その呼ばわりの主体は「わたしたち」とあるように、まだ民族としての、複数の人々であった。

ダビデについては、後の詩篇のところで考察してみたいが、サムエル記下に次のような歌を主に捧げている。

死の波がわたしを囲み

奈落の激流がわたしをおののかせ

陰府の縄がめぐり

死の網が仕掛けられている

苦難の中から主を呼び求め

わたしの神を呼び求めると

その声は神殿に響き

叫びは御耳に届く (サムエル記下 22・5-7)

これは、戦いの敵から救われたときの感謝の歌であるが、ここで言われている死や苦難は、戦いに於けるそれを超えて、苦難一般を意味しているようにも思える。

## 歴代志・列王記

列王記 8 章には、ソロモン王がエルサレムにはじめて神殿を建立した時、神に捧げた祈りが記されている。これは、ソロモン王が「主の名」のために神殿を建て、イスラエルの民が主に向かって呼ばれる時、主がそれに耳を傾けられることを願う祈りである。歴代志下 6 章などのにもこのような言葉が散見されるが、その祈りにこたえて、エホバは次のように言われる。

もしわたしの名をもって呼ばれているわたしの民が、ひざまずいて祈り、私の顔を求め、悪の道を捨てて立ち帰るなら、わたしは天から耳を傾け、罪を許し、彼らの大地をいやす。(歴代志下 7・14, 15)

列王記下 5 章には、スリヤ王の軍勢頭ナアマンが癩病にかかり、これを癒すために預言者エリシアを訪ねる記事がある。ナアマンは彼に「ヨルダンに行って身を洗え」と言われたとき、彼は自分の思惑と違ったので、次のように言った。

彼が自ら出てきて、わたしの前に立ち、彼の神、主の名を呼び、患部の上で手を動かし、皮膚病を癒してくれるものと思っていた。(列王記下 5・11)

結局、彼はヨルダンで身を清め、病いやされたが、ここに、「主の名を呼んで苦難から救われる」ことが異邦人にも知られていたことが分かる。このことは、注目に値する。

## ネヘミヤ記

ネヘミヤ記 9 章にも、「エホバに呼ばれる」という文字が見える。バビロン捕囚から解放されたイスラエル人が、エズラ、ネヘミヤの指導のもとに、エルサレムの再建に力を尽くした。彼らは大懺悔を行ったが、その時の情景がこの章に記されている。その「呼ばわり」は、彼らの先祖がエジプトを脱出した時の「呼ばわり」を再現、回顧したものであった。神はその「呼ばわり」にお答えになったのに、再び、三たび、彼らが神に背いたことを懺悔している（ネヘミヤ記 9・4, 9・27）。

その時エシュア、バニ、カデミエル、、シバニヤ、ブンニ、セレビヤ、バニ、ケナニらは、レビびとの台の上に立ち、大声をあげて、その神、主に呼ばわった。（ネヘミヤ記 9・4）

そこであなたは彼らを敵の手に渡して苦しめられましたが、彼らとその苦難の時にあなたに呼ばわったので、あなたは天からこれを聞かれ、大いなるあわれみをもって彼らに救うものを与え、敵の手から救わせられました。

（ネヘミヤ記 9・27）

## ヨブ記

ヨブ記を見ると、彼も神を呼ぶ人であったことが分かる。神によびかけて、

答えていただいたこともある者が

友人たちの物笑いの種になるのか（ヨブ記 12・4）

神に呼び掛け、神の誠命に従って正しい道を歩んできたヨブであったが、あまりに不条理な苦難にのたうって、口走る。

しかし、わたしが呼びかけても返事はなさるまい。わたしの声に耳を傾けて下さるとは思えない。（ヨブ記 9・16）

災いが彼に臨むとき、

その叫びを神は聞いてくださるであろうか。

全能者によってよろこびを得

常に神を呼び求めることができるだろうか。（ヨブ記 27・9, 10）

神よ、私はあなたに向かって叫んでいるのに、あなたはお答えにならない

御前に立っているのに、あなたはご覧にならない。（ヨブ記 30・20）

神への叫びは、今までは神の耳に達し、聞かれてきた。しかしヨブの叫びはなぜ聞かれないのか。エリフは言う。

だから、叫んでも答えて下さらないのだ。

悪者が高慢にふるまうからだ。

神は偽りを聞かれず、

全能者はそれを顧みられない。

あなたは神を見ることができないというが

あなたの訴えは御前にある。

あなたは神を待つべきなのだ。(ヨブ記 35. 12-14)

ヨブは神の前で、自分の義を主張した。それは人の目には正しく見える。神がそれを正義と認められないのは、人には理解できない。神の思いと、人の思いはそれほど次元の異なるものなのだ。神に対する「呼ばわり」は、この世の幸せを目的にしたものであってはならない。十戒に、「汝の神エホバの名をみだりに口にあぐべからず」とあるが、そのために神の名をみだりに称えることを戒められたものであろう。しかし神は言い給う。

誰が鳥のために餌を置いてやるのか

そのひなが神に向かって鳴き

食べ物を求めて迷い出るとき。(ヨブ記 38・41)

それが神のみ心にかなう「呼ばわり」であるなら、ひなのような小さなものの「呼ばわり」でも、神は聞くと言っておられるのである。そして、神はヨブを祝福し、以前に増す幸福を与えられた。それは、彼の主張を神が認められたからではなく、神の思いは人の思いを超えることを彼が悟り、神の前にひれ伏して悔い改めたからであった。ここに、後になって、人に与えられる神の義認の予徴が認められる。